

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：37118

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370536

研究課題名(和文) 地方議会議事録の社会言語学的研究-バリエーション研究の事例として-

研究課題名(英文) On the Use of Minutes of Local Assemblies in Sociolinguistic Studies

研究代表者

二階堂 整 (NIKAIDO, Hitoshi)

福岡女学院大学・人文学部・教授

研究者番号：60221470

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、地方議会議事録が日本語研究の資料として有効性を明らかにすることを目的としてきた。そのため、方言と現代日本語の2つの側面から、研究を進めた。セミフォーマルというスタイルの提言や気づかない方言の分布・用法の分析、さらに誤用の分析や俗語の用法の変化、オノマトペの分析、動詞活用の変遷などである。これらを通じて、日本語研究の新たな資料価値を、地方議会議事録に見出すことができた。

研究成果の概要(英文)：This project had as its purpose to evaluate the Minutes of Local Assemblies for the study of Japanese language from two perspectives: dialects and the contemporary Japanese. The topics included a proposal of semiformal style, geographical distribution and the usage of unnoticeable dialect, analysis of misuses, changes in the vulgar languages, analysis of onomatopoeic words, changes in the verbal conjugation patterns. Through the analyses of these diverse phenomena, we concluded that the Minutes of Local Assemblies presents a new data for the study of Japanese language.

研究分野：方言学

キーワード：方言 地方議会 会議録 セミフォーマル 気づかない方言 オノマトペ らへん 尾ひれ

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 地方議会会議録は市町村も含め、9割以上がネットで公開されている。基本的に話し言葉の大量のデータで、検索が可能にもかかわらず、これまで、言語研究には、あまり利用されてこなかった。同様の会議録である国会会議録は松田(2008)などで研究が進められているが、地方議会会議録は高丸・木村・渋谷(2011)などで研究が始まったばかりである。

(2) 例えば、議会会議録を言語資料として用いた研究には、松田(2008)があり、国会会議録の言語資料としての可能性が示されている。ただし、これは国会という場の発話を記録したものであることから、共通語についての言語変異や言語変化の考察が主となる。一方で、地方議会会議録は、地方議会という場の発話を記録したものであるため、そこには方言的事象が見られる。このことについては、いくつかの研究によって少しずつ注目されてきている。例えば井上(2013)では、地方議会会議録の検索により、「去った日」という表現(「去る日」の意味)が沖縄県の議会でのみ使用されていることを指摘している。しかし、地方議会会議録の言語資料としての可能性、とりわけ方言資料としての可能性はまだ十分に示されていないというのが、研究開始当初の状況であった。

## 2. 研究の目的

本研究では、地方議会会議録が言語研究の資料として有益であることを示す。具体的には地方議会会議録が、方言研究資料として、十分な固有の価値を持つこと、さらに現代日本語研究の資料として有効であることの2点である。「会議録」の話し言葉としての資料性、文法、語彙における地域差や現在進行中の変化等、様々な角度から考察を行うことで、地方議会会議録を用いた日本語研究の可能性を示す。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究では各地の地方議会会議録を主に検索システムを使って分析する。

議会に出現する方言を分析し、多様な研究が可能であることを明らかにする。地域的バランスも考え、主に福岡・大阪・栃木・青森の議会(及び市議会)を比較し、さらに各議会の本議会と委員会を比較検討する。対象議会は、どこもほぼ10年間以上の会議録がデータ化されている。また議会録画資料により、音声も確認可能である。

(2) 地方議会会議録は地方議会の本会議及び委員会の発言を書面又は電磁的記録により記録したものである。ネット上における議会会議録の公開が進み、自由に閲覧できる。委員会の会議録は公開されていない場合があるが、高丸・木村・渋谷(2011)によると、

2010年の段階で都道府県議会は100%、市・区議会は95%以上が議会会議録をネット上に公開している。多くの自治体で全文検索システムを導入しており、年度・発言者・キーワードなどを指定することで、発言を抜き出して表示できる。また、議会中継の録画をネット配信している議会も増えており、発言された音声を確認することも可能である。

(3) 竹安(2004)によれば、地方議会議員の87.6%が現在居住する都道府県で生まれ育っている。従って、議会は概ね同一方言話者同士の発言の場であると考えられることができる。

(4) 以上から、地方議会会議録を分析することで、現代日本語や方言の研究が可能になると考えた次第である。

## 4. 研究成果

(1) 本研究は、地方議会会議録の日本語研究資料としての有効性を明らかにすることを目的としてきた。そのため、方言と現代日本語の2つの側面から、研究を進めた。

具体的には、セミフォーマルというスタイルの提言や気づかない方言の分布・用法の分析、さらに誤用の分析や俗語の用法の変化、オノマトペの分析、動詞活用の変遷などである。これらを通じて、日本語研究の新たな資料価値を、地方議会会議録に見出すことができた。

(2) まず、方言研究の面では、具体的にスピーチスタイルの「セミフォーマル」の提言と気づかない方言「そうすれば」を例に、地方議会会議録の言語資料としての可能性を示した。

(3) 1つは、スタイル研究における可能性である。議会の議員発言の中には、フォーマル(よそいき)とカジュアル(ふだん)の中間にあたるセミフォーマルというスピーチスタイルを見出すことができることを提案した。以下に福岡県議会の例を示す。

福岡県議会では、委員会において、A議員は「だから、就職も本気になってさせるごときや、ならんもんが悪いとやないかなと思いますけどね。(中略)ここで教育の話したっちゃしょうがないけどですね。」と発言している。一方、本議会では同じA議員が、「私は、X委員会の委員長といたしまして、ただいま議題となりました第四号議案「P予算」など二十一件の審査経過並びに結果について御報告いたします。いずれの議案も県政運営上緊要なものであり、慎重に審査を行ったところではありますが、特に当面する県政の重要課題を中心に活発な論議が交わされました。」と発言している。

どちらも正式な議会の場であるが、委員会の場合は方言が混じる。しかし、その談話は、

友人と話すような方言談話とも異なる。友人との談話なら、「です」「ます」といった敬語は出現しない。また、福岡では若年層でも頻出する原因・理由の「ケン」(冒頭が、方言ならば、「だから」でなく、「ダケン」になる)が使用されていない。このことは、従来の、よそゆき・共通語/ふだん・方言という2段階の区別を見直すことにつながり、新たに中間に「セミフォーマル」をおいた3段階の使い分け(少し丁寧な方言の存在)を指摘することができる。

(4) セミフォーマルは調査困難な事項である。「少し丁寧な方言で話して」と言っても、自然な談話の収集は簡単ではない。その点、会議録はそれを可能にするだけでなく、議会という統一条件による全国比較も可能となる。議会会議録ならではの研究といえると考えている。

(5) もう1つは、気づかない方言研究における可能性である。地方議会会議録を用いることで、実際の使用にもとづいた気づかない方言の用法分析と複数地域の比較による地理的広がり研究ができることを述べた。具体的には青森県議会・弘前市議会などを中心に、東北でみられる、気づかない方言「そうすれば」を分析した。

まず、弘前市議会の会議録をもとに、津軽地域における接続詞的な「そうすれば」の意味用法を明らかにした。弘前市議会では、「そうすれば、私、ちょっと議事進行させていただきます。」のように、接続詞的な「そうすれば」が見られる。このような接続詞的な「そうすれば」は共通語にはない。議会という改まった場面で出現した、まさに「気づかない方言」の例と言えるであろう。会議録の実際の用例を見ることで、津軽地域では、地方議会というかなりあらたまった場において、共通語にはない接続詞的「そうすれば」が「解釈・推論 態度表明 転換」などの用法で用いられていることを明らかにした。

さらに、接続詞的「そうすれば」がどのような地理的広がりをもっているかについても明らかにした。青森県、秋田県、岩手県、宮城県、山形県、福島県の東北六県における、各県議会、および県庁所在地の市議会を対象として、共通語でも見られる従属節的なもの、共通語では見られない接続詞的なもの(「解釈・推論 態度表明 転換」)、いずれで「そうすれば」が用いられているか意味用法別に使用頻度を調査した。その結果、青森県、秋田県を中心に、北東北では接続詞的な「そうすれば」が多く用いられているのに対して、宮城県、山形県、福島県などの南東北では接続詞的な「そうすれば」がほとんど見られないことがわかった。このように、地方議会会議録を用いることで、気づかない方言の地理的広がりをも明らかにできる可能性が示された。

(6) 上記2例は、いずれも、改まった場面における実際の発話に基づく言語資料である地方議会会議録があってこそ可能となる研究である。このことは、従来の方言研究の基本である、生え抜きの普通の談話資料を超えた領域の研究を生み出すことにもつながるであろう。

(7) 次に地方議会会議録の日本語研究の資料としての有効性を示したい。そのため、様々な角度からの4つの研究成果を以下に記述していく。

(8) まず、最初は大阪市議会会議録を対象にした、サ変動詞の変異と変化についてである。サ変動詞活用のゆれには、大別してサ変と上一段(論ずる~論じる)、サ変と五段(適しない~適さない)の2種類があり、その実相については電子データ、法令、アンケート調査などの報告がある。ここでは大阪市議会会議録を用いて同一地域での変化の進行を詳細に追跡し、その内的制約条件を詳細に検討することが可能であること、またその制約条件のありようから、大阪市で進行中の変化と先行研究で調査されてきた変化が同一のものと考えられることを示した。

サ変と五段のゆれの言語内的要因には、「語幹」部分が特殊拍を含むか否か、さらにその特殊拍が長音か、それとも撥音や促音なのか、また特殊拍を含まない場合は、その語幹が一拍なのか二拍なのかが大きく関わることが先行研究で明らかにされている。大阪市会データから、大阪市で進行中の変化も上記の内的制約条件に従うことを実証した。大阪の五段化の主たる内的制約条件である語幹の特殊拍効果が、首都圏や書き言葉で確認されたものと同じという事実は、二つの変化が同一のものであることを示している。

今後の課題では、大阪府議会会議録と東京都議会会議録の分析、また長期に職議員の発話から生涯変動の有無を検証することがある。東京都議会会議録の分析から、西日本が東日本よりも進んでいるとされる五段化の進行具合が確認可能であろう。

(9) 次に、地方議会会議録に見られるオノマトペの研究の結果を示す。

まず、自治体のウェブサイト公開されている地方議会会議録のうち425自治体分(約81億文字)を収集して構築した地方議会会議録コーパスと、全文検索機能・マップ機能・クロス表機能をもつ横断検索システム(以下「横断検索」と略称)を紹介した。

この地方議会会議録コーパスのうち2010年度の会議録(約3億語)を対象として、『日本語オノマトペ辞典』(小野正弘編 2007小学館)の意味分類索引に掲載された語の抽出を試みた。比較的丁寧な話し言葉である議会発言において、オノマトペは豊富に使用

されていることを指摘した。会議録コーパスを活用したオノマトペ分析の事例として、コロケーションと出現地域の偏りについて述べた。語義の多いオノマトペ「ごろごろ」を含む発言文を係り受け解析し、「ガ格」および「係り先動詞」を抽出し、幾つかのコロケーションが特定の語義に関連することを示した。六地方分類による出現確率の集計により、本発表の対象オノマトペの出現確率は西日本で高いことを指摘した。出現地域に偏りのあるオノマトペの具体例として、「ぴちっ」(中国・四国地方)、「かちっ」(近畿地方)が方言形の発言で使用されていること、「ぴしゃっ」(九州地方)が方言的な語義で使用されていることを述べた。

今後は、表層形が変化したオノマトペや方言オノマトペを対象に加えて、さらに分析を進める予定である。

(10)次に、地方議会議録における慣用句派生表現の使用について、述べていく。

地方議会議録を用いた研究例として、公的場面における慣用句派生表現の使用について考察した。ブログのような私的な文章には、慣用句の「尾ひれが付く(を付ける)」が派生した「尾ひれはひれが付く(を付ける)」といった表現(以下、同様の表現を「尾ひれ~ひれ」とする)が見られる。こうした表現の公的場面での使用状況を、調査を目的としない無意識的な発言である、地方議会という公の場における発言である、全国各地の地方議会と比較することで地域差を観察できる、という3つの利点を持つ地方議会議録を用いて検証した。

「横断検索」を用いた結果、「尾ひれ~ひれ」の用例数は「尾ひれが付く(を付ける)」全体の1割強存在し、それらが大きく2タイプに分けられることがわかった。1つは「はひれ」のように実質的な意味を持たず、単に語調を整えるタイプ、もう1つは「背ひれ」のように「尾ひれ」から意味的に連想されるタイプである。前者は「根掘り葉掘り」の句構成を「尾ひれが付く(を付ける)」に当てはめたタイプ、後者は「尾ひれ」と「尾ひれ」を混同したことによって、「尾ひれ」に関連する「背ひれ」などを付加させたタイプであるという説を示した。また、前者は東日本、後者は西日本に用例が偏るといった傾向が見られ、「尾ひれ~ひれ」のタイプには地域差の影響も予測されることを述べた。

(11)最後に、地方議会議録における接尾辞ラヘンの通時的・地理的展開を述べる。

地方議会議録を使った研究例として接尾辞ラヘンを取り上げ、通時的・地理的展開の様相を明らかにした。接尾辞ラヘンは「そこらへん」「どこらへん」等の指示詞用法から「東北ラヘン」「机ラヘン」のようにラヘンが一般の名詞に付く一般用法が生じたものである。

接尾辞ラヘンの調査には国会議会議録(国会議会議録検索システム)・地方議会議録(「横断検索」)を用いた。両者とも地理的展開を把握できるが、通時的展開をみるには戦後から現在までの全議録を収録する国会議会議録が適している。ただし、指示詞用法・一般用法ともによく発言されるのは地方議会議録である。これらのことから、両議録を用いることで接尾辞ラヘンの展開を網羅的にみることができると考えた。

結論として、通時的には「指示詞用法は1950~1970年代に全国に広まり、現在でもよく使用される。一般用法は1960年代以降に出現するが、その出現頻度・出現地域は指示詞用法には及ばない」こと、地理的には「指示詞用法が先行して使用される関東・中部・近畿地方では、一般用法の使用も先行する。特に近畿地方での使用は1970年代から突出し、現在に至るまで続いている」ことがわかった。一般用法は、指示詞用法のあとを追う形で展開しているといえる。以上、接尾辞ラヘンを対象とした研究により、近現代に発生した新表現の展開を把握するために地方議会議録が有用であることを示した。

(12)以上から、地方議会議録が現代日本語の研究においても、有用な資料であることを示すことができたと考えている。

#### <引用文献>

井上史雄(2013)「去った日」『ことばの散歩道』, 154-155, 東京: 明治書院。

高丸圭一・木村泰知・洪水英潔(2011)「全国の市町村議会議録のウェブ公開とデータ提供の状況」『都市経済研究年報』11, 47-72。

竹安栄子(2004)「地方議員のジェンダー差異」『京都女子大学現代社会研究』7, 99-118。

松田謙次郎(編)(2008)『国会議会議録を使った日本語研究』東京: ひつじ書房。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

田附敏尚(2016)「青森県五所川原市方言の文末形式「デバ」について」『Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin』No.19 pp.123-135,(査読なし), 10.14946/00001829

高丸圭一, 内田ゆず, 乙武北斗, 木村泰知(2015)「現代オノマトペ・コロケーション・データベース構築のための係り先動詞の分析」第31回ファジィシステムシンポジウム, pp.415-420.(査読なし)

二階堂整, 川瀬卓, 高丸圭一, 田附敏尚, 松田謙次郎(2015)。「地方議会議録によ

る方言研究」『方言の研究』1, 299-324, ひつじ書房. [ 査読有り ]

〔学会発表〕(計3件)

— 二階堂整, 松田謙次郎, 高丸圭一, 山際彰, 佐藤亜実. 「地方議会会議録から見える日本語のバリエーション」『日本語学会2015年度秋季大会』2015年11月1日 山口県立山口図書館(山口県・山口市)

— 二階堂整, 川瀬卓, 高丸圭一, 田附敏尚, 松田謙次郎. 「地方議会会議録による方言研究の可能性」『日本方言研究会第99回研究発表会』2014年10月17日 北海道大学(北海道・札幌市)

— 二階堂整. 「福岡の議会会議録における方言についての一考察」『筑紫日本語研究会』2013年12月27日 九州大学(福岡県・福岡市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

二階堂 整 (NIKAIDO, Hitoshi)  
福岡女学院大学・人文学部・教授  
研究者番号: 60221470

### (2) 研究分担者

松田 謙次郎 (MATSUDA, Kenjiro)  
神戸松蔭女子学院大学・文学部・教授  
研究者番号: 40263636

川瀬 卓 (KAWASE, Suguru)  
弘前大学・人文学部・講師  
研究者番号: 80634724

田附 敏尚 (TATSUKI, Tosihisa)  
神戸松蔭女子学院大学・文学部・講師  
研究者番号: 90645813

高丸 圭一 (TAKAMARU, Keiichi)  
宇都宮共和大学・シティライフ学部・准教授  
研究者番号: 60383121